



■能楽、日本の文化

越野：宗家は能楽師でいらつてると同時に、この能楽堂を拠点とされた経営者でいらつてると。更にいろいろ社会貢献をされていらつてらつていて、現在の能楽界の渋沢栄一として、二言いただけです。どうですか。

観世：いえいえ、そんな大それた事は、私は経営者というよりも、公益社団の理事長という立場と宗家の立場で流儀を束ねております。経済界との関わりでいえば、新日本製鐵(現日本製鉄)の千葉県の君津、それから北海道の室蘭。特に室蘭は、一年に一回、能狂言の鑑賞会を長年やっております。私も子ども頃の頃に、室蘭に何度かお邪魔いたしました。また、室蘭ご主催で、いわゆる「伝統文化」に触れる催しを開催され、経済活動と同時に、芸術文化にも非常にお力を頂戴いたしました。君津には観世流の謡曲部がござりました。

その流れを汲んでおられる方々が、今でも個人的に流儀の謡仕舞の稽古に通ってられます。私も良い能を舞うということでも日々稽古しておりますが、やはり日本製鉄様の芸術に対するご理解と言つてどうですか、やはりそういう社会事業としてご理解協力いただくというところは大変ありがたいでございます。

これは文化芸術活動というのは、己の稽古だけではなくて、何か底上げ、社会事業を賜るということが非常に大事なことでないかなと、つくづく感じております。

越野：財団でまとめていただいた渋沢栄一の日記によると、いろんなイベントの後に、能楽が披露されているというのが多いんですね。ですから今のお話なんつていうのは、まさに明治の経営者の方のDNAが、日本製鉄さんの中にも脈々とあったと言つていいんじゃないですか。

観世：明治の頃、岩倉貞視がヨーロッパに行き、パリでオペラを観たときに衝撃を受けたんですね。そこではと我に返って「日本の国技・文化芸術って何だろう」とつて、すべ明治天皇に上奏を申し上げて、「能楽をやらないと、外国の賓客の接遇ができませんよ」と。「まさか、ちよんまげでオペラやるわけにはいかないでしょう」と。かなり岩倉が強硬に明治天皇へ上奏を申し上げたその記録文書の写本を、ついこの前、明治神宮から頂戴いたしましたところなので。

■経営者が学ぶべき事

越野：渋沢翁が提唱されました合本主義、それから道徳経済二説などから、現在の日本の経営者が何を学び、実践すべきでしょうか。

三村：道徳経済二説つて、言葉が難しくよく分かんないですね。そこで、私益と公益の両立つていうことで解釈いたします。今、世界経済全体は、自由主義経済対全体主義経済、この対立構造の中で動いております。なんとかがこの競争の中で、自由主義・資本主義経済が勝ち抜いていかなきゃいけないと思えます。

しかし、勝ち抜くのは非常に難しい。何故ならば、資本主義には致命的な欠陥がいくつもある。その最大のもは、経済の成長が大きければ大きいほど、所得格差が拡大する事です。資本主義には、その所得格差を縮小させるメカニズムは全く備わっておりません。従つて、我々がなんとかこれを解決しなければ、全体主義との競争に勝てないと、ついついこのことになりませぬ。もう一つ非常に必要なのは、経営者のモラルだと思えます。私はその中で、渋沢栄一の言っている「私益と公益の両立」というのが一番分かります。腹にすんと落ちるんですよ。これを表現するのは簡単なことではありませぬ。渋沢栄一も、恐らく悩みは回もあつたんじゃないかと

思いますよね。しかしそれを、ただ単に口で唱えるだけじゃなくて、具体的な事実として実行することが必要だと思っております。例えば、企業の経営会議などでも私益と公益の両立というのを、どういうバランスでやるのか、悩みながらみんなで議論して、一つの結論を導き出す、そういうことで、具体的な実行例がたくさん出てくる。これが、今の経営者にとっては必要なことではないでしょうか。それが、我々の自由民主主義を長く保つ最大の助けとなることだと思っております。

越野：渋沢翁について、名誉会頭が思想を意識すると言つるか、学ばれたきっかけというのは、やはり会頭就任ですか。

三村：率直に言つて、残念な話なんですけど、私は商工会議所の会頭になるまで、渋沢栄一のことを各前は知っていただけで、「論語と算盤」なんて読んだことなかった。

だから思想に触れたことは、率直に言つてゼロだったわけでありませぬ。しかし、東京商工会議所が創立されたのが一八七八年ですから、二十代目の会頭になります。その四〇周年にあたりませぬ。私は二十代目の会頭になります。その四〇周年に何をやるうかというところで、事務局といろいろ相談しました。その結果、四〇というのが語呂合わせですけども「意思を」と読めますので、渋沢栄一翁の思想をこの世に広げることが、要するに現代的な価値があるのではないだろうか、このように考え、講演会とかシンポジウムとかたくさんやりました。実はそのとき渋沢翁について本当にたくさん勉強しました。「論語と算盤」というのは、人生訓の集まりですよ。これは渋沢栄一が書いたものではありません。彼の話したことを集大成したのが、「論語と算盤」で、ぜひとも読みいただきたい。そういう形で渋沢翁の思想には触れたということが事実であります。

■近代文化の発展に向けて

越野：文化の面でも渋沢栄一は造詣が深く、初代の帝国劇場設立の中心人物でもありました。実は飛鳥山では、日本で最初のハワイアンダンスを楽しんだり、能楽はもちろんで、落語談話なんかも愛したという面があるんですね。

樺山：渋沢は二八歳のときにパリの万国博の視察に出かけました。そのときに大変驚いたことがいくつもあった。もちろん、最先端の経済発展も一つですが、同時に、あの国には、大変大きな文化がある。絵画がある、あるいは演劇がある事に驚きました。

人々がそれによって心豊かになつていく、そういう文化をつくり上げていく国であつた。同じことを私たち、日本で考えなきゃならないんじゃないかと、大変強い思いをしたと書いています。だからまず、日本にも様々な文化を根付かせなきゃいけないと考える始